

## 4Y-8

川 島 大 司  
(東 海 女 子 大 学)

## 1. はじめに

日本語ワード・プロセッサを使用する際、我々が乗り越えなければならない課題の一つに入力がある。現在、入力はキーボードからほとんどなされているが、手で文字を書くようにあるいは言葉にしてしゃべるようにキーボードを使うことができれば、ワード・プロセッサを使いこなすことに非常に有効となる。そのためには、ブラインド・タッチを修得しキーボードを自在に使えることである。そこで、これに対してワード・プロセッサの初期の学習におけるブラインド・タッチの習得を試みた。

ブラインド・タッチの習得をするために、学習の最初からキーボードを一切見ないように、物理的制御をした場合としない場合の有効性についての実験を行ったので報告する。

## 2. 実験方法

## 2.1 実験器具

物理的な視覚の制御をする道具として、キーボードを覆うための木箱。以下これをブラインド・ボックスと呼ぶ。

## 2.2 実験条件

次の様なグループで実験を行った。

## (1) UB 群

ブラインド・ボックスを使用し物理的な視覚の統制をする。

## (2) NB 群

ブラインド・ボックスを使用せず物理的な視覚の統制をしない。

両グループに、ブラインド・タッチの習得と入力速度の向上を目指してもらった。

## 2.3 被験者

UBグループ 8人, NBグループ 4人  
どちらも女子大学生1, 2年生

## 2.4 教育範囲及び教育方法

ローマ字仮名漢字変換方式で、文字を入力するだけの範囲として、編集機能等の教育はしなかった。教育範囲の全てを練習を始める前1日で終了した。

## 2.5 練習問題及び練習方法

ひらがなばかりの短い有意味な綴りの単語や漢字の熟語、漢字仮名混じり文、英字、数字の入った練習問題を一度に被験者に渡し、それらの問題を繰り返し練習してもらった。練習は1回につき1時間とした。

## 2.6 測定方法

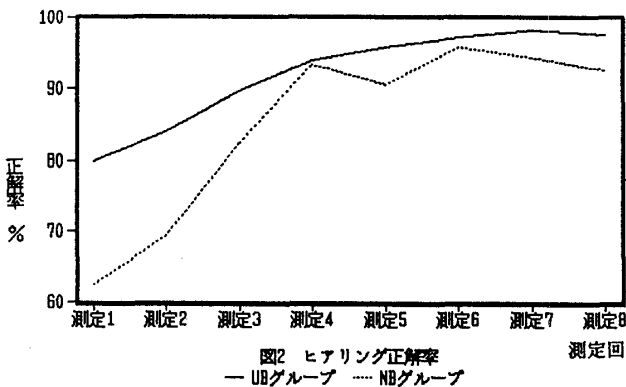
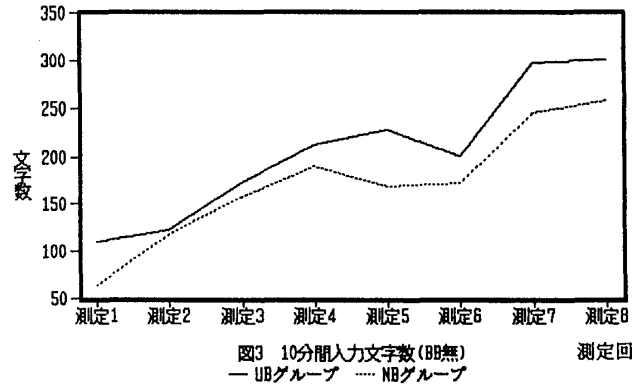
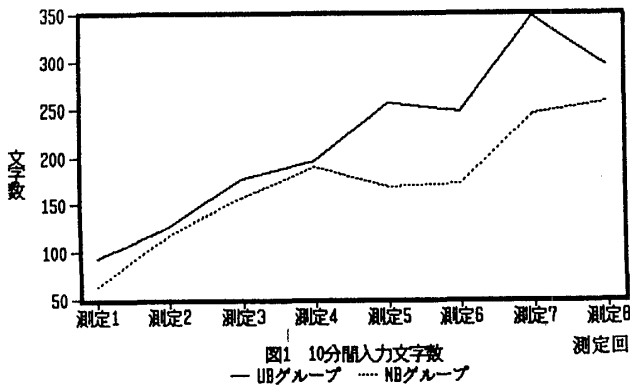
10分間入力文字数とヒアリングによって学習の効果を測定した。10分間入力文字数は入力速度をみるもので、ヒアリングはキー位置の把握をみるものである。10分間入力文字数の入力問題は日本商工会議所主催のワープロ検定2級の問題を使用し、両グループにブラインド・ボックスを使用した測定と使用しない測定を行った。データの集計方法は、日本商工会議所主催のワープロ技能検定試験の採点基準を用いて、正解文字数を入力文字数とした。

ヒアリングは、和文タイピスト技能検定試験問題集を用い、3秒毎に一文字を読み上げて、両グループともブラインド・ボックスを使用したまま入力してもらい、読まれた文字全体の数に対して、打てた文字が何パーセントにあたるかの比率でみた。

測定は練習3時間終了毎に行い、測定回数は総合して8回となった。

毎回練習後、ブラインド・タッチができていたか、ブラインド・ボックスにどのような感想を持ったか、努力した点などの内観報告を提出させた。

### 3. 結果及び考察



#### 3.110分間入力文字測定

図1はUBグループ(測定時にブラインド・ボックス使用)とNBグループ(測定時にブラインド・ボックス未使用)の10分間入力文字数の変化を示したものである。初期段階では両グループの差はほとんどないが、後半になってUBグループのほうがNBグループより100文字ぐらい入力する文字が多くなっている。このことより、ブラインド・ボックスを使用して学習をしたほうが効果があることが認められる。

#### 3.2ヒアリング正解率

図2はUBグループとNBグループのヒアリング正解率の変化を示したものである。初期段階では著しい差があるが、後半になるとあまり差がなくなっているが5%ぐらいの差が認められる。

#### 3.3内観報告

両グループとも最後には、ブラインド・タッチができるようになったと言う報告があるが、特にUBグループの方は測定2,3回頃から

ラインド・タッチができるようになってきている。また、いったんブラインド・タッチができるようになったと報告されたあとは、そのまま同じ報告が続いた。内観報告からもブラインド・タッチを行うのに、ブラインド・ボックスを使用するほうが効果があると考えられる。

#### 3.4通常入力での比較

10分間入力文字測定、ヒアリング正解率、内観報告の結果からは、ブラインド・ボックスを使用して学習したほうが効果があることが認められた。しかし、ワード・プロセッサを通常使う場合、ブラインド・ボックスを使うことはほとんどありえないので、図3にUBグループ(測定時にブラインド・ボックス未使用)とNBグループ(測定時にブラインド・ボックス未使用)の10分間入力文字数の変化を示した。

図1と図3のUBグループを比較すると、後半で測定時にブラインド・ボックス未使用のほうが50文字ぐらい入力する文字が少ない。しかし、NBグループよりは入力する文字は多くなっている。UBグループの被験者がブラインド・ボックスをはずすと、キーボードの文字が目に入ってかえって打ちにくいとか、かえってやりにくいと言う内観報告があった。

このことより、ブラインド・ボックスを使用して、それを外した時に起こる認知的な妨害をどのように排除するかを考えれば、ブラインド・ボックスを使う条件が有効にブラインド・タッチの学習に影響すると考えられる。